

サンタクロースのプレゼント

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鐸木, 道剛 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24779

サンタクロースのプレゼント

大学宗教授任 鐸 木 道 剛

ローマの使徒への手紙 第十四章八節

8 わたしたちは、生きるいとすれば主しゅのために生き、死ぬしとすれば主しゅのために死ぬしのです。
従したがって、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主しゅのものです。

クリスマスのシーズンとなりました。昔、ディケンズの『クリスマス・キャロル』の映画を見て、とても感動したことがあります。クリスマス・キャロルの映画はたくさんありますが、一九八〇年頃のアルベルト・フィニーがスクリーンを演じた『スクリーン』という題の映画です。とても貧しいクラチット家の末の男の子、足の悪いティムが歌います。「この美しい冬の朝に、ぼくの願いがかなうなら、夢見た国は、今ここに実現するだろう」(In this beautiful winter morning, if my wish could come true somehow, then the beautiful day that I dream about would

be here and now) 」という歌です。『クリスマス・キャロル』は、ケチなスクールジが最後に改心して、ティムを初めとして多くの人にプレゼントと寄付をする話です。

ぼくの家庭でも子供にはサンタクロースを信じるようにしてきました。娘がまだ幼いとき、サ
ンタさんからのプレゼントなにか欲しい?と聞くと、「そり」というんですね。「そり?」とは
思いましたが、幼稚園の遠足で雪のあるところに行ったらいいのです。それで「そり」、プラス
チック製の「そり」です。それを隠れて買ってきて、夜中にそおっと枕もとに置いたのですが、
娘はそれを察して起きていたのか、見つかってしまいました。「いや、玄関でサンタさんにつ
たので、預かって来たんだ」とか苦しい言い訳をしましたが、どうもバレたみたい。その後も
ずっと「サンタさんはいるんだ」と言い続けていたら、どうも子供は外で、「うちでサンタを信
じているのはお父さんだけ」という状況になっていたらしいのです。

またぼく自身の子供のときの思い出もあります。教会で毎年使うサンタクロースのお面がとて
も不気味なお面だったのです。今、そのお面はもう教会にはありません。聖劇をしたり手品をし
たりで楽しんだあと、とうとうサンタさんが来るといので、みんなでサンタさんを迎える歌を
歌いましょうとなります。それが短調の怖い歌なのです。「ゆきよふれふれふりつもれ、ゆきよ
ふれふれふりつもれ、さんたくろーすのおじいさんが……」という歌です。だんだん不安な気分

になってきます。そして教会の正面の大きな木の扉が外からドンドンと強くノックされます。子供たちの恐怖は頂点に達します。そして不気味なお面のサンタさんの登場。左右に挨拶しながら聖堂奥まで歩いていくのですが、泣き出す子供もいます。ぼくも子供るとき「お父ちゃん」と泣いたらしいです。そしてその年のサンタさんは父がサンタさんになっていたとのこと。今となつては笑い話ですが、貴重な幼児体験でした。

というのは、サンタクロースを信じるのは、ファンタジーのためであつて、それは子供の感受性で、つまり社会生活を営むには不要な感受性です。しかしそれを忘れてはロボットのような乾涸びた人間になってしまいます。子供の感受性は忘れてはならないのです。しかしそれはあくまで大人としてです。子供の世界とは恐怖に満ちています。肖像画を怖がる、単なる絵なのに怖いといえます。これはぼくの研究テーマの偶像論なのですが、子供は恐怖に満ちています。シュールレアリズムとは、そういう子供の感受性を大人が楽しむことです。アンドレ・ブルトンがそう言っています（『シュールレアリズム宣言』一九二四年）。いや芸術そのものが子供の感受性を忘れては成り立ちません。聖書にもいいます。「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」（マタイ伝十九章十四節、マルコ伝十章十五節、ルカ伝十八章十七節）。しかしまた「かつては幼子のように考えていた、しかし成人した今、幼子のこ

とを棄てた」(コリント前書十三章十一節)ともいいます。子供の感受性は大切ですが、しかし子供のままではないことに注意です。

それからもうひとつサンタクロースが重要である理由があります。これはサンタクロースの起源に関わります。クリスマスにプレゼントをする習慣です。貧しい人々へのプレゼントは、サンタクロースの名前である聖ニコラの逸話からあります。聖ニコラは、プレゼントしたのが誰か、わからないように、プレゼントは家の窓から投げ込んで行ったらしいです。サンタクロースのプレゼントの習慣はそこからきています。実際は親が準備するのだけれど、サンタクロースが準備したことにする。サンタクロースという存在を信じるファンタジーを育てることに加えて、誰かわからない人からのプレゼント、「足ながおじさん」の話もそうです、そういう観念を知ることが大切です。誰かわからない人からの恵み。これは神さまの果てしない恵みに他なりません。

現実生活のなかでの人からの贈与は、負い目を負うことになります。ギブアンドテイクといいます。ぼくの嫌いな言葉です。ギブアンドテイクの関係に本当の愛はありません。神さまの恵みは違います。神さまの恵みは果てしなく、一方通行です。それを我々も知らねばなりません。

プレゼントは本来、貧しい人へのプレゼントです。「貧しい人のためにしたことは、私にした

ことだ」とイエスも言われました（マタイ伝二十五章四十五節）。クリスマス・キャロルの話では、タイムのためです。豪華な商戦で消費をかき立てられて、自分のために、あるいは自分の恋人のために贅沢することは全くクリスマスの喜びではありません。しかしこのごろ、「自分へのご褒美」ということばがあります。ちよつと贅沢をするときに使います。しかしこれは言い訳です。後ろめたさを隠蔽する言い訳です。

今度土樋の礼拝堂のステンドグラスの修復にお金を使うことが決まりましたが、これにはたくさんのお金が必要です。それだけのお金があれば、たくさんのお金が必要な人々を助けることができるでしょう。ステンドグラス修復が自己目的すれば、それは偶像崇拜です。しかしステンドグラスの修復は東北学院のためではありません。東北学院が自己目的化すれば、それは偶像化です。偶像とはこのことです。有限なこと、有限なものが自己目的となれば、それはすべて偶像になります。すべては「神のよりおおきな栄光のため（*ad majorem Dei gloriam*）」です。「我々は生きるも死ぬも主のためである」とのパウロの言葉（ローマ人への手紙十四章八節）を思い出しましょう。